

名前	五年	組	番
----	----	---	---

あきらさんは、「じんぎつね」を読んで、以前に読んだ「大造じいさんとガン」とひかくして次のような感想をもちました。物語と感想を読んで、後の問いに答えましょう。

「じんぎつね」

新美 南吉 作



これは、わたしが小さいときに、村の茂平（もへい）というおじいさんから聞いたお話です。

（と中の文を省いています。）

「ようし。」

兵十（ひょうじゅう）は立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って、火薬をつめました。そして、足音をしのばせて近よって、今、戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。

ごんは、ばたりとたおれました。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりがかためて置いてあるのが目につきました。

「おや。」

と、兵十はびっくりして、ごんに目を落しました。

「ごん、おまえだったのか、いつも、くりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落しました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。

【あきらさんの感想】

「じんぎつね」と「大造じいさんとガン」の二つの物語には、いくつか共通点があります。まず、人から聞いた話をもとに作られていることです。また、動物が主人公としてえがかれていることも共通しています。

じんぎつねのごんは、山の中に住む一人ぼっちの子ぎつねで、村へおきては悪さばかりしています。でも、それはごんのさびしさからくるものかもしれないとぼくは思います。

ある日、自分のしたいことが、兵十をとでも悲しませたことをごんは知ります。その日からつぐないが始まります。しかし、兵十とごんの気持ちのすれちがいがから、ごんはじゅうでうたれてしまいます。土間にくりがかためて置いてあるのを目にした時の兵十の気持ちはどんなだったでしょう。この時になって、ごんは初めて「ひとりぼっちじゃない。ぼくの理解者ができた。」と思ったのではないかと思います。

一方、残雪はガンの頭領（とうりょう）で、頭もよく、むれをひきいてリーダーとしてりっぱに大造じいさんと戦います。とくに感動したのは、おとりのガンがハヤブサにねらわれたときの「さつと、大きなかげが空を横切りました。ガンの頭領残雪です。残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。」というところです。仲間がいるから、強くも優しくもなれるのではないかと思います。大造じいさんが、人間にしか使わない「英雄（いゆう）」という表現で残雪をよんだのもわかる気がします。

このように、どちらの物語にも、最後には人と動物の気持ちの通じ合う場面があったことも、動物好きのぼくには、うれしく思われました。

一 あきらさんは二つの物語の共通点をあげています。それはどんなことですか。【あきらさんの感想】から三つ、そのまま書きぬきましょう。

ア	イ	ウ
---	---	---

二 【あきらさんの感想】の——線部「人から聞いた話をもとに作られていること」「じんぎつね」のどこから分かりますか。当てはまる部分を本文中からぬき出しましょう。